

横浜市幼稚園教育研究大会全体会

子どもが「いのち」に見える学校・社会

～被災地の中学生たちと見つめた「いのち」～

講師／和光大学現代人間学部 身体環境共生学科准教授

(前・東松島市立鳴瀬未来中学校) 制野 俊弘先生

NHKスペシャル「命と向きあう教室～被災地の15歳・1年の記録～」の映像を交えながら講演頂きました。

最大の防災は人間が「いのち」に見えるようになること

生まれも育ちも宮城県。東京に出稼ぎにきています。保健体育教師歴27年、「生活綴り方」という作文教育に取り組んできました。「ひとがいのちにみえる」ということはどのようなことなのか実感を持って頂きたい。意味を考えたい。

「いのち観」が変われば「子ども観」が変わる。「子ども観」を持っていたつもりだったが、そこに震災で風穴が空いてしまった。半分は反省。半分は教訓。今「いのち観」に係る問題が学校で沢山おきている。これを変えない限り、いくら言葉で子どもたちを育てようと思ってもなかなか難しい。ここを今日は皆さんと考えようと思っています。

宮城県東松島市は建物用地の65%が浸水し、人口44,000人の町で1,109名が亡くなり24名が現在も行方不明。学校は海から200mほどの美しい松原の中にありました。津波が来た時は卒業を祝う会を行っており、ホテルの4階から津波が通りすぎるのを上から眺めていた状況でした。

津波発生当日の映像を時間の経過と撮影者、周りの人の行動を共に観て頂きたい、たった49秒の間に本当にあっという間に津波が入ってきて流されてしまう。どんな行動をとっているか見て頂きたい。撮影者、周囲の方々、足元に津波が押し寄せてからやっと避難の行動に入ります。横浜も非常に海に近いですので万が一同じようなことになれば人間の心理として同じようなことが起こるのではないかと防災については深く認識をしないと我々だけでなく、子ども・お年寄り自分にとっての大事な人をなくしてしまいかねない。大きな教訓として心にとめて頂きたい。

生き残るということ

ある男の子は母と避難、首まで水につかりやっと避難、「生き残ってしまった」とつぶやく。何度も自問する「自分は生き残ってしまった」作文の中に津波の後、父親が

自分を探しに自宅に戻った。お父さんは自分のせいで亡くなった。

自分のせいで誰かが亡くなる。耐えられますか？自分は助かってああよかったという思いだけど、それと引き換えに誰かが亡くなったと思うと、なかなか想像できない。大概が幸せだったら良いではないかという話ではないのです。クラスに一人でもこういう子どもがいた時に教員はどうするかということを常に考えておかなければならない。いじめ・不登校・引きこもり・虐待の問題等を抱えている子どもがいた時にその子を中心にした学級を作るとか。その子を囲むような学校づくりができないと全然幸せになれない。一人の幸せがない限り、全体の幸せはないと私はそう思って震災後教育をしてきました。

被災地には声なき声で叫ぶ子どもたちが沢山います。いくら嬉しそうな顔をしていてもいくら元気そうな顔をしていてもそうではないのです。元気そうな顔。笑っていると何かこちらが癒されたといいます。心の中は見えません。しかも子どもですからどんなことが渦巻いているかきちんと対峙していかないと見えないのです。

今日はそんな子どもたちの声を皆さんと確かめ合いたい。実は私を含めて皆さんは実は何も知らないということを胸に刻まないと、これが出発点です。本当は何も分かっていないのだと確認しないと今日は帰れません。

現役の教え子は3名亡くなり身近な方も沢山亡くなりました。子どもたちはなぜ亡くなったのか？一番の原因は教育にあった。考えられるのは備えがなかった。こういう時はこうしろ、こうなったらこうだぞということができていなかった。子どもたちが亡くなったのは我々の教育の責任。今思えば死なせてしまった。自分たちよりも先に逝かせてしまった。言葉では言ってきましたけれど、伝えきれていなかった。実感として。いのちの紡ぎ方、こえからどうやって生きていこうね。これからどうやっていのちを育てていこうか。いのちの使い方。大事なんだよ。大事なんだよ。言葉で言ってきましたが、でも本当の意味で教えきれませんでした。いのちの繋ぎまともそうです。

震災で祖父はなくした子は流された自宅の跡地で語り部活動をしています。祖父が立っていた場所で「もし、あの時真っ直ぐ家にかえっていれば・・・」何度も自問自答。いくつも「もし」を繰り返しながら祖父のいた場所で語り部を続けています。子どもたちに悲しみ、苦しみ。辛さというものを無造作に手渡してしまったのは私たちだったということでした。半分懺悔のつもりでできました。こんなことは二度としたくない。

美しい湖を子どもと一緒に見ている風景が、感じる風が違うのです。これが決定的なところ。我々知っているつもりでいるのは、良くないよとはこういうことです。心に傷を負った子どもとか心に何かを抱えている子どもたちが見えている風景と我々が見ている風景とか、感じる感覚は全く違うということです。

これが教育の原点だと思うのですけれども、ふと忘れてしまうのですね。何か私は子どものことを知っているぞ。何か私情報をつかんでいるぞ、子どものことなら私誰よりも知っているよ。と思うこと自体不遜です。違うのです。教師の悪い癖、知っているつもりで実は何も知らないのだ。ということ肝に銘じて教育を始めないと私のよ

うな失敗をしてしまう。こどもが発する一言一言どういう意味があるかやはり考えて応答しないと足下を掬われてしまう。

絶対的な彼我の差が顔を出すのです。これは何と云ってしようがないところでもありますけれどでもやっぱり何とか彼我の差を埋めなくてならない。こう心に傷を負った子どもにどうやって寄り添っていくのか考えた時にこっちはこっちの世界、あっちはあっちの世界と分けてはいけない。なんとかわかってあげようと努力はしなければ無理でもやはり届かないところがある。

分かったつもりで分かっていない、努力しているつもりでも実を結ばない。そしてうめくのですね。そのようなことだからそんなのだからやはり逝かせてしまったんだなというふうにこれを今日は皆さんに伝えたい。

津波の中でおこったことを、4人の中学生が書いた作文から紹介します。

* 公成君の話です。母親と共に津波にのみ込まれ、小屋の屋根に登って九死に一生を得て、助かった子です。この子は、つぶやくのです、「自分は生き残ってしまった」と。母親から聞かされたのです、父親が自分を探しに家に入った為に亡くなってしまったことを。父は僕のせいで亡くなった、自分のせいで誰かが亡くなるなんて耐えられない、皆さんも、自分の代わりに誰かが亡くなるなんて、想像できますか？生き残った子どもたちは元気に過ごしているように見えますが、中にはこのような思いの子どももいるということです。

大概が幸せならいいじゃないかという話ではないのです。一人の幸せがない限り、全体の幸せはないのです。教師はそういうクラス作りをしていかなければならないのです。

私は教え子を3人亡くしました。教え子たちはなぜ亡くなったのか？一番の原因は、私たちの教育にあったのです。いのちの紡ぎ方や使い方を大事なんだよと言葉では言ってきましたが、本当の意味で教えきれませんでした。

* 語り部活動をしている、ほのかさんの話です。彼女は大好きだったお祖父さんを津波で亡くしました。彼女は下校途中に地震が来て、小学校に戻りました。お祖父さんは家で、孫の帰りを待ち続けていました。「もしあの時、まっすぐ帰っていれば…」という思いに捉われて、彼女は現在自宅の跡地で、立ち位置は必ずお祖父さんの立っていた場所で、いくつもの「もし」を重ねながら「語り部」しています。辛いだろうなと思います、彼女は自分がこの場所からでないと伝えきれないと言います。こういう子どもたちの悲しみ、苦しみ、辛さも無造作に手渡してしまったのは、私たちの責任と思っています。

* みうさんの話をします。駅伝の合宿で、夏休みに田沢湖へ行きました。久しぶりの遠出で、青い湖が見えると歓声があがりました。みうさんが「いいなあ、湖って」とつぶやきました。

隣にいた私は、「どうして？」聞いてしまいました。「だって、津波こないもん」。これは全くのうかつでした。みうは津波で母親を亡くしていました。傷を負った子どもが見ている風景と、我々が見えている風景や感じる感覚とは全く違うのです。私は子どものことなら誰よりも知っているよと思うこと自体が不遜で、知っているつもりが実は何も知らないのだということを肝に銘じて教育を行わないと私のように失敗をしてしまうのです。子どもの発する一言一言にどういう意味があるのかを考えて応答しないと、足元をすくわれてしまいます。傷を負った子との絶対的な彼我の差は、何とか寄り添っていきたい、わかってあげたいという努力をしなければいけないと思います。

*まなきさんの話です。彼女のお母さんは介護施設で働いていて、おじいさん、おばあさんの手をひいて小学校へ避難しますが、その避難先で津波にのまれてしまいます。運動会の最後に風船を飛ばす企画がありました。彼女は最後まで風船を飛ばすことができませんでした。それは大好きな母を忘れてしまいそうで、風船をなかなか飛ばせなかったのも「忘れてしまう」と思ったからです。まなきは叱ります、母親のことを。「人の命を助ける前に、自分の命を助けろよ。なんで死んだんだよ。死んだらもう、会えないじゃないか、甘えられないじゃないか」。本当の怒りを隠して、彼女は決めます。「もうママとは呼ばない。お母さんと呼ぼう。もう頼らない。何で死んだんだよともう言わない。私は私で生きる」

矛盾を背負って、葛藤を抱えて生きている子がいるということを知りました。

3. 「命とは何かを問う授業」へ

転校生のあみさんを紹介します。我慢して、前向きに生きようとして苦しんでいる子です。女川で震災に会い、生まれた町がなくなり、帰る所がなくなりました。父母もいません。母方の実家へ小さな弟と来て、祖母と暮らしています。生きるためです。しかし最大の原因は、小さな弟を守ることです。クラスの子どもたちは、何も言わずに受け入れます。だから、彼女は打ちあけることができないまま、ずっと生活をします。でもやっぱり気づくのです、聞いてほしいことに。本当は寂びしい、本当は弱いということ。踏ん張り続けることは無理だということ。でも、私がお父さんだから、私がお母さんだから、弟が大きくなるまで私は泣かないと決心します。私は、見えない心にどう向き合うのか、また壁にぶつかりました。何とか言葉で解決しようとしませんが言葉は無気力です。「そばにいるだけでいいのだ」と自覚すればいいのですが、教師は不安になるのです。

そこで、個別やチーム指導をやめて、あらゆる周波数を探しました。誰かの声が届けばいいのだと、チャンネルを切り変えました。そして、行き着いたのが、作文を書かせることでした。あみの作文を、みんなの前で読ませました。子どもたちは事情を知り、つながりました。ある男の子は作文に、「知らないことは罪」と綴りました。知ろうとしないこと、知ろうともしない自分に気づかないことも、ひどいことです。

あみの心の中が分かったのは、NHKスペシャルの番組で、運動会でのあみが挨拶する場面からです。「私にとって心の復興というのは、震災で経験した辛い思いを乗り

越えて次へ進むということです。後悔をあまりしないようにしました。」私はこの言葉が今でも気になっています。この言葉に彼女の矛盾というか大変さが表れていると思いました。後悔は、コントロールするものではないからです。私は彼女に、「人は後悔してもいいんじゃないの？」と言いました。その後、あみが書いた作文です。「お父さんとお母さんが亡くなって、光が届かない暗闇に閉じ込められたようでした。私は、お父さんとお母さんの方へ手を伸ばそうとします。しかし、全然届きません。届くことがないと実感していても、こんな悪循環をあの日から繰り返しています」。私は彼女の気持ちをみんなに伝えたい、友達はきっと受け止めてくれると思うと伝えました。作文をみんなの前で読むと、子どもたちが作文を書いてくれました。ゆうま君の作文には「ふとした瞬間に二人を思い出して、もういないんだなあと思うことがあります。それと似ているのかも知れません。僕が思うに、誰かに助けを求めてもいいと思います。簡単には解決しないけど」と書かれていました。「そっと助けてやればいい」と書いた不登校の女の子もいました。

作文の授業は、自分の知らない自分の本当の姿を見つけます。子どもたちは、「いくら考えてもその人にはなれない」、「綺麗ごとばかり書いても意味がない」、「同じ苦しさを知ることができないのが辛い」等、感じたことを書いてくれました。

4.最後に

命とは何かを問う授業には、答えがありません。点数や偏差値で答えのある教育になりつつありますが、問い続ける教育へ。答えがないと問えない教師から答えをともに探ろうとする教師へ。心に闇を抱えている子どもにとっては大事な教師です。

命の危機の共有体験を綴ることが、子どもたちの心を開きました。いのち観が変われば子ども観が変わり、子ども観が変われば教育観が変わり、教育観が変われば社会も変わります。そう念じて教育をやっている訳ですが、最終的に行き着いたのは、人に優しくなることです。誰でも、根源的な優しさを持っています。それを信じて引き出すことです。

日本に住む限り、「震災後」という言葉はありません。すべて「震災前」なのです。普段の我々が平穏に暮らしているこの日常は仮の姿とってください。さまざまな偶然が重なっていると思ったほうがいいです。記憶の危機は、命の危機に直面します。皆さん、ぜひ記憶に留めてください。